

# 解体の時代

東京大学 特任教授・建築学  
松村 秀一  
Shuichi Matsumura

## 東京駅周辺の 変わり様

半年ほど前のことになるが、用があつて日建連のある八丁堀に出かけた。天気も良かったので、帰りは東京駅八重洲口まで歩くことにした。八丁堀からしばらくは特に前と変わった様子はなかったのだが、八重洲で出くわした光景には驚かされた。

コロナ禍以前までは八重洲の雀荘に時々行っていたのだが、その雀荘の入っていた雑居ビルだけでなく、同様の雑居ビルが数十或いはそれ以上の数建っていたのではないかと思しき街区が、丸々空き地になつた。

ていたのだ。一瞬くらくつとして方向感覚を失った。そう言えば、東京駅をはさんで反対側、丸の内風景もすっかり変わった。

二十世紀の初めまでだが、東京駅に集合した学生と一緒に丸の内から大手町まで、オフィスビル等の外装デザインを見て歩くという授

業を担当していた。当時のルート上で主要な見学先を挙げると以下のようになる。

保存再生工事が行われる前の東京駅の煉瓦積み外壁（一九一四年）。大正期の世界最高水準のオフィスビルを目指した丸ビル（一九二三年）と一九八〇年代にGRCを用いて改修されたその外壁。建築



1999年秋、丸の内での見学授業（東京大学建築学科進学内定2年生受講）。東京駅前に集合。右端2名の間に日本工業倶楽部会館、正面に今はなき新丸ビル、左端に東京海上日動ビル本館が見える。

家吉田鉄郎の代表作で、窓配置等のプロポーションが素晴らしい東京中央郵便局（一九三三年）。日本の鋼構造建築のパイオニアでもあった横河民輔設計の日本工業倶楽部会館（一九二〇年）。丸の内地区で高さ一〇〇mを初めて超え、当時はその高さについて色々と論争が起こつた前川國男設計の東京海上日動ビルディング本館（一九七四年）。外壁における本磨きの花崗岩とアルキャストの組み合わせ、その造形が印象的な村野藤吾設計の旧日本興業銀行本店（一九七四年）。ざっとこんなところである。流石東京駅周辺。各時代を代表する建築ばかりであつた。

た。内装関係が既に運び出された後だったこともあるが、現場は新築よりも綺麗という印象だ。

## 循環型産業創出の予感

切り出された床板を見ていると、これは新築現場で言えば立派な大型パネル。コンクリート強度も十分に発現しているし、劣化も進んでいないのだから、これからの建築プロジェクトの多くが解体から始まるというところ、そしてこのままだと廃棄物処理費用は右肩上がりだろうということを考え合わせると、静脈産業を含めた新たな循環型産業創出の予感を止められなくなる。

## 綺麗な解体現場

慣れ親しんできた建物が解体された後には、以前の建物よりも高いビルが建つ。東京駅周辺のような高地価のエリアではそれが起こる。端的に言えば、すべての跡地には超高層ビルが建つのである。

超高層ビルと言えば、東京で霞が関ビルに次いで二番目に古い浜松町の世界貿易センタービルが解体さ

れている。もちろん跡地にはもっと高いビルが建設される。

今や建物の新築は古い建物の解体とそれによる用地確保から始まる。ぎつしりと建物が建てられてきた今日の都市部では、解体なくしては用地確保が難しい。だから、解体はプロジェクトの第一歩になるし、建築産業にとっては必要不可欠でとても重要な業務になる。

そのような認識から解体の勉強会を始めていたが、世界貿易セン

タービルの解体は時代の先端を行く解体現場の一つだと聞いて、早速見学に伺わせていただいた。

新築現場さながらタワークレーン二台が設置され、JR浜松町駅等近接する建物が多いなか、ほとんどの揚重作業を建物内で行うという難作業をこなしていた。タワークレーンの稼働率に留意して床等も大型パネル状に切り出して下ろす等、見学前に想像していたのよりも遙かに新築に近い計画工程だつ